



2023年

6月第3・4週の主日礼拝説教要約

・6月18日：マルコ福音書 2：18 - 22 .

『 新しい革袋に 』

・6月25日：マルコ福音書 2：23 - 28 .

『 人間のために 』

衣笠病院教会 牧師 宮原晃一郎

私が選ぶ断食とは、不正の束縛をほどき、軛の横木の縄を解いて、虐げられた人を自由の身にし、軛の横木をことごとく折ることではないのか。飢えた人にパンを分け与え、家がなく苦しむ人々を家に招くこと、裸の人を見れば服を着せ、自分の肉親を助けることではないのか。(イザヤ書58:6-7)

今日のお話の中に出てくる「断食論争」では、ユダヤ教の掟に従って断食をすべき時に、イエスと弟子たちがそのとおりにしていなかったことが問題視されます。

教会史を学ぶと、イエスなき後の古代のキリスト教会でも水曜日と金曜日に断食をしていた記録がありますので、今日の断食論争以降、永久に断食を実施しなくなっていたわけではありません。ただ、イエスが地上にいた時に彼らの間で、断食が中断されることがあったのかもしれませんが。イエス自身は、この日の少し前に、荒れ野で40日間の断食を済ませたばかりです。しかし、弟子たちに強いることは、していなかったようです。その理由が譬え話を用いて語られます。

花婿と一緒にいる時に、婚礼の客は断食をしたりはしない。

婚礼は、今も昔も人生の旅立ちの時、祝いの時です。入学式や入社式、開会式や開所式と同じで、わざわざ断食をするために一堂に会する人はいません。イエス・キリストが直に人々と交流している時とは、そのくらいに、いやそれ以上に歓び溢るる時、感極まる時でした。

今から76年前の8月1日に、日本基督教団衣笠病院が創立しました。その翌年の年度替わり直前の3月に、初代牧師兼チャプレンとして中島房男先生が招聘されて、病院2階の職員食堂にて日曜日の主日礼拝が守られるようになりました。これは教団から“教会創立”の認可が下りる3か月以上も前のことです。神様の計らいだったのでしょうか、そこは食堂でした。けっして断食をする場所ではありません。認可前にもかかわらず、な

ぜか出席者が“教会員18名”で(?)始まったひそやかな日曜日の礼拝でした。「新しい葡萄酒」が「新しい革袋」の中でこそ膨張し熟成されるように、この新しい教会は、病院の職員食堂から始まって、そこから大きな成長を遂げることとなります。

さて、上記のイザヤ書の58章で語られている神の御旨に従えば「断食をしている暇があったら社会奉仕をなさい」という教えです。そこで言われていることは、「虐げられた人を自由の身にし…飢えた人にパンを分け与え、家がなくて苦しむ人々を家に招くこと、裸の人を見れば服を着せること」であり、これらの行いは、は衣笠病院の創立の精神であるマタイ福音書25章31節-40節の内容に直結しています。逆境にあって苦しむ人々こそこの世では「最も小さな者の一人」であるけれども、これにしたことは神に対する行い(奉仕)そのものなのだと教えています。

日本基督教団立の衣笠病院は、宗教法人の教会とは分離して社会福祉法人へと変わりましたが、その後も“同じ精神”の下で一緒に歩みを進めています。

《 人間のために 》

安息日は人のためにあるのであって、人が安息日のためにあるのではない。だから人の子(イエス・キリスト)は安息日の主でもある。

(マルコ福音書2:27-28)

今日のお話は、イエス・キリスト自身の言葉(上記)で締めくくられています。いわゆる「安息日論争」とは、当時のユダヤ人の中に、杓子定規で頑迷固陋な人々が少なからず存在したことを示す、典型的なエピソードの一つです。どうしてそこまで彼らの心は頑なになってしまったのでしょうか。これには彼ら(イスラエル)自身の長い歴史と深く関わっています。

約束の地のカナンを目指して、シュメールの古代都市であるカルデア人のウルを出発したのがイスラエル民族の父祖であるアブラ(ハ)ムでした

が、紆余曲折の末、彼の子孫が目的地のカナンに定住するまでに数百年を要しました。遅延の理由は、聖書によると彼らが神の御旨に逆らったことがあげられています。

その後、預言者（＝立法者）モーセを通して成文化された神の掟に反することは神とイスラエルの間に締結された契約に違反することであり、神の逆鱗に触れるとの認識に至る一方で、その抜け道のために、人間の側から様々なルールがひそかに追加されていくことになったようです。こうした歴史的背景の中で後日、それらの全ての掟が本当に神からのものだったのか、それとも神の御旨とは無関係に成立したものなのか、識者たちの間で事実関係について疑念がつきまとうようになります。

イエスの発言の中にも、イスラエル人の頑なさ故、神からの律法にモーセが手を加えてしまった事例（マタイ福音書 19：8＝離婚規定の追加）が指摘されています。

さて、今日の聖書における論争では、イエスの弟子たちが安息日に麦畑を通過中に麦の穂を摘むと、なぜかそばで見張っていたファリサイ派の人物が、その行為は安息日の規定に違反しているとの警告を発したのです。ファリサイ派の基準によると、安息日でも救命は黙認されていました。けれども、道々穂を摘むことは、これを“見逃す。”と、必然的に“摘まみ食い”に発展し、安息日でなくとも問題行為と判断されました。

しかしイエスは彼らの主張を一蹴します。民族の偉大な祖先のダヴィデが、ある時、飢えに苦しむ自分と手下のために祭司アヒメレク（アピアタルではなく）のもとを訪れ、聖別された祭壇の供え物のパンを祭司から譲り受け、待ち侘びる手下のところに持ち帰った例（サムエル記上 21：1-7）があり、イエスは救命と同様に、他にも優先すべき事例が存在することを教え、杓子定規に「人間が安息日のために存在している」わけではないことを告げたのです。もちろんご自身が“安息日の主”でもあることを示しつつ。